

18世紀末フィラデルフィアの娯楽批判

社会改革を支える諸価値の創出

乙 須 翼

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

要 旨

アメリカにおいて、飲酒や賭博、暴力や動物への虐待を伴う娯楽への批判が本格的になされるのは、1820年代、30年代以降のことである。中流階級の人々を中心に行われた社会改革で、古くからある娯楽の多くは姿を消すか、形を変え、娯楽に対する人々の眼差しや態度は変化していく。本稿はこういった変化が見えつつあった18世紀末の娯楽批判の特徴を捉えるものである。

アメリカでもいち早く社会改革が進められたフィラデルフィアの娯楽批判の言説空間では、古くからある娯楽が怠惰や浪費、貧困、犯罪と結びつくものとして批判される。またそれと同時に、健全な家庭生活や勤勉の精神、名誉、時間、健康、他者や動物の悲劇や痛みへの感受性といった諸価値がそこでは提示される。つまり、18世紀末の娯楽批判の言説空間とは、19世紀初頭の本格的な社会改革を支える「ミドリング・クラス」の価値観を提示、創出する、そういった場でもあったのである。

キーワード

社会改革、娯楽批判、感受性、動物に対する暴力、ミドリング・クラス

はじめに

本稿は、18世紀末フィラデルフィアの娯楽批判の特徴を、雑誌や新聞に掲載されたエッセイ、ならびに社会改革者の論説から明らかにしようとするものである。

アメリカにおいて、飲酒や賭博、暴力や動物への虐待を伴う娯楽が、本格的に批判の対象となっていくのは、1820年代、30年代以降のことである。禁酒運動や奴隷解放運動、日曜学校運動や刑務所改革など、人間のモラルや家庭生活に関わる様々な社会改革が中流階級の女性達を中心に行われ(Rothman[1990])(Glenn[1984])(Boylan[1988])、動物愛護団体の登場(ターナー[1994])や産業化に伴う社会構造の変化も重なり、古くからある娯楽の多くは批判され、代わりに「合理的余暇」が推奨されていた(Martin[1995:187-226])。

娯楽批判そのものは民衆娯楽が盛んであった

イギリスに古くからあり、宗教改革以後、ピューリタンによる批判が、カトリックの儀式的排除や安息日遵守、怠惰への攻撃といった観点から常に繰り返されていた(マーカムソン[1993])(松井[2000])。イギリスの娯楽文化を引き継いだアメリカにおいても、植民地初期より、厳格なカルヴァン派やクェーカー教徒による娯楽批判は常に存在していた。けれども本稿が対象とする18世紀末の娯楽批判は、19世紀初頭には本格的な改革運動にまで発展し、結果として人々の娯楽に対する態度や習慣までも変じさせていく。つまり、それまで日常的に目にし、楽しみとしてきた娯楽を、改良すべき対象として批判的に眼差させるような説得力ある説明論理が、この時期の娯楽批判には萌芽的であれ含まれていたと想定できる。

そこで本稿では、アメリカでもいち早く社会改革に取り組んだフィラデルフィアの娯楽批判

に着目し、雑誌や新聞に掲載された記事と当時を代表する社会改革者ベンジャミン・ラッシュ (Rush, Benjamin) の論説を分析し、その特徴を明らかにしていく。その際、論者が用いるキー・ワードやレトリックにも注視し、この時期の娯楽批判が説得力を持ち得た理由についても考察していきたい。娯楽批判自体が少ないため限られた史料からではあるが、本格的な社会改革の時代を目前にしたアメリカ社会の文化的特質を少しでも明らかにできればと考える。

1. 娯楽批判を支える文化

娯楽批判の分析に入る前に、ここでは簡単に18世紀末フィラデルフィアの社会状況を確認していく。

フィラデルフィアが属するペンシルヴェニア州は、植民地創設者であるイギリス人クエーカー教徒ウィリアム・ペン (Penn, William) の宗教的寛容政策により、ヨーロッパ各地から多様な宗派の人々を受け入れてきたことで発展してきた地域である。その中でもデラウェア川沿いに位置するフィラデルフィアは、船舶がもたらす人や物資、また最新の啓蒙哲学や医学理論といった知的情報で溢れ、18世紀末には人口六万人を抱える大都市であった。また独立革命期の政治的中心地であったことは言うまでもない。

次に、フィラデルフィアの文化的特徴として確認しておくべきは、植民地初期からフィラデルフィアの基盤を築いてきたクエーカー教徒についてである。彼らは十二の宗教倫理に基づく厳格な生活様式を信仰の中心としていたが、彼らの「勤勉」、「儉約」、「節制」といった倫理からすれば、娯楽はまさにそれらに抵触するものであり、ギャンブルや飲酒はおろか、演劇や小説類の読書まで禁止すべきものであった (村田 [1993 : 258])。18世紀後半以降、フィラデルフィアにおける政治的影響力こそ失うものの、貧困者や子ども、奴隷や犯罪者に対する社会改革団体を組織するなど、彼らの文化的影響力は

依然として大きなものがあった (Haviland [1992])。

またクエーカー教徒とならび、娯楽批判を支える文化を形成していたのが、ベンジャミン・フランクリン (Franklin, Benjamin) に代表される「資本主義の精神」であった (ヴェーバー [1989])。18世紀後半から貧困者が増え続けていたフィラデルフィアでは、救貧院やワーク・ハウスなどの施設化改革が他地域に先駆けて進められ、「怠惰」な貧困者を「勤勉」な労働者とすべく対策が講じられていく (Nash [1976])。アメリカでも有数の大都市であるフィラデルフィアには、怠惰や浪費への厳しい眼差しと、勤勉や儉約、経済的有用性を重んじる文化が早くから存在していたのである。

2. 法による娯楽の規制

上記のような特徴を有するフィラデルフィアでは、ペンシルヴェニア州法として、1779年に「悪徳と不道徳禁止のための法律」¹⁾が制定されている。この法律は1786年には「悪徳と不道徳ならびに非合法的なゲームの禁止および無秩序なスポーツと気晴らしを抑制するための法律」²⁾として拡充され、1794年には同法の改正が行われている³⁾。これらの法律はこの時期にはほとんど実質的な拘束力を持たなかったとされるが (Jable [1978 : 346])、法的規制の対象となった娯楽がどのようなものであったかを確認するため、以下1794年法を概観してみたい。

1794年法においてまず規制の対象となったのが、キリスト教の安息日である日曜日の娯楽であった。日曜日には慈善活動などを除き基本的に全ての労働が禁止されたが、娯楽については賭博 (unlawful game)、狩り、射撃、そしてスポーツや気晴らし (diversion) が禁止されている [Section I] ⁴⁾。続くセクションでは、神を冒瀆する言動 [Section II] や過度な飲酒による泥酔 [Section III] が処罰の対象となっている。

またこの法律の中で最も多くの分量が割かれているのが、賭博であった。そこでは、金銭を

賭けて行われる闘鶏 (cock-fighting) や競馬 (horse-racing) といったアニマル・スポーツの他、カードやさいころ、ビリヤード、ボール、シャッフル・ボード⁶⁾などを用いた賭博が挙げられている [Section V]。当然これらの賭けに参加した本人は罰金や強制労働、監獄への収監といった罰を受けるが、娯楽の主催者や、場所を提供した居酒屋 (tavern, tippling house) やパブリック・ハウスの経営者も、罰金や営業許可の取り消しといった刑が科せられることとなっていた [Section VI]。また賭けで負った債務の救済措置が定められるなど [Section VIII, IX]、賭博に関しては細かな規定がなされている。

もう一つ、1794年法で厳しい規制の対象となっていたのが、決闘 (duel) であった。剣や刀、銃など危険な武器を用いた勝負を他人に挑んだ場合、決闘を挑んだ本人と挑戦を受けた側はもちろん、挑戦状を運んだ人や決闘に加わった人にも、罰金や市民権の剥奪などの刑が科せられていた [Section X]。他の娯楽に比べて厳しく処罰されていたことが伺える。

以上まとめると、安息日の娯楽と神への冒瀆行為、居酒屋などで行われる過度な飲酒や賭博、そして決闘、これらが法的に規制された娯楽であった。では、これらの娯楽はいかなる理由で批判されたのか。次節からは娯楽批判の言説を分析しながら、この点を見ていくことにする。

3. 社会改革者ベンジャミン・ラッシュの娯楽批判

社会改革初期の娯楽批判の特徴を明らかにするにあたり、まずは当時のアメリカを代表する社会改革者ベンジャミン・ラッシュの声に耳を傾けてみたい。

ラッシュは当時のアメリカで最も著名な医者であり、アメリカ初の精神科医である。独立宣言に署名するなど政治家としても活躍した彼は、独立革命後は奴隷解放運動や禁酒運動、刑罰改革や日曜学校設立など、様々な社会改革に

主導者として関わっている。医者として、また社会改革者としての彼の思想は、スコットランド啓蒙哲学や連合心理学、機械論などに影響を受けていたとされる⁶⁾。

では娯楽について彼はいかなる考えを有していたのであろうか。彼の著作の中で、娯楽をタイトルに掲げたものとして、学校での子どもの娯楽について述べた「学校でふさわしい娯楽と罰についての考察」(1796)⁷⁾がある。この論説は後で少し触れるとして、ここでは改良すべきアメリカの慣習について論じた「アメリカのあらゆる宗派の牧師達に向けたモラルに関する演説」(1788)⁸⁾(以下「モラルに関する演説」)から、彼の娯楽への批判を確認していく。

ラッシュが人間のモラルへの悪影響を理由に改良すべきとした八つの慣習のうち、まず批判が向けられたのは飲酒であった。アメリカの「禁酒運動の父」とも呼ばれた彼の禁酒論⁹⁾は、後の禁酒運動の理論的根拠となったとされている(高野 [2007])が、「モラルに関する演説」の中で彼は飲酒を次のように批判する。

蒸留酒は人の気質 (temper) を怒りっぽく、また熱情的 (passionate) にさせる。口論を引き起こし、俗悪で聞き苦しい言葉を吐かせる。そして蒸留酒は怠惰と浪費の根源である。また貧困の確かな前兆で、しばしば監獄や手押し車、絞首台の前兆でもある。加えて蒸留酒は健康や生活にも有害であり、伝染病や剣よりも多くの人々を殺してしまう [Rush, 1788 : 115]。

ラッシュはまず飲酒によって引き起こされる人間の興奮状態や粗暴さを批判の理由として挙げる。そして、怠惰、浪費、貧困、また絞首台や監獄という形で暗示される犯罪との結びつきにおいて飲酒を批判する。健康への悪影響は語られるものの、人間のモラルに関わる部分に強調点が置かれていることが見て取れる。

飲酒に続いて彼が挙げたのが市民軍 (mili-

tia) についてであった。彼は「市民軍の演習のために開かれる会合は、飲酒、口論、神への暴言、そして近隣住民の財産を破壊する行為など、概して放縦 (intemperance) が伴う」と述べ、市民軍は有事にのみ編成され訓練されることで十分だとする [Rush, 1788 : 116]。つまり市民軍の訓練が単なる男性同士の会合と化し、好ましくない行為を引き起こすだけのものとなっていることに疑問を呈するのである。

同様の批判は、当時多く存在していた男性同士のクラブにも向けられた。彼は、「クラブが開かれるような居酒屋での社交はほとんど秩序が守られていない。クラブは男性を怠惰にし、浪費させ、借金を作らせる」として、「クラブというクラブは全て、モラルにとって有害である」と述べる [Rush, 1788 : 118]。フィラデルフィアには、科学や技術について論議、研究する知的なクラブも多く存在し、ラッシュのような医者や職人、商人など様々な層の人々が「知的余暇活動」に参加していた (村田 [1993 : 248-263])。知的クラブを含めた全てのクラブを彼が否定していたとは思えないが、いずれにせよ、男性同士が一齐に集う場や機会そのものが彼にとっては危険視すべきものであった。

また大勢の人が集い、飲酒や賭博、口論などが誘発されるものとして、古くからある次の慣習にも彼は批判を向ける。

定期市 (fairs) は多くの州において年に二回開くパンドラの箱である。定期市はもはや全く必要がない。なぜなら我が国の文明化された地域では、店舗が一般的であるからである。また定期市は、放蕩 (extravagance) の誘因となる。つまり、賭博、酩酊、不貞 (uncleanness) といったものである [Rush, 1788 : 116]。

年に一回から二回開かれる定期市は、もともとは家畜やチーズ、金物などの取引の場として発展したものであった。しかし次第に商業的機

能よりも、娯楽的要素が強くなり、人々の大きな楽しみの一つとなっていた (マーカムソン [1993 : 49-55])。ラッシュはこのような商業的機能を失った定期市はもはや不要だとし、むしろ放蕩をもたらす慣習として批判するのである。

この他にもラッシュは訴訟について、「法廷への参加は人々を、怠惰、飲酒、賭博にさらす」と批判し、それに続けて、「判決が遅れることで先祖代々続く住民間の不和 (discord) がまた必ず伴う」と言う [Rush, 1788 : 117]。そして「放逸な出版物 (licentiousness of press)」についても、紙上でなじり合う行為は、「コミュニティに復讐心やスキャンダル、嘘を産みだし、それらは増殖していく」として、出版物が原因となった殺人などを例に、「新聞上で個別に行われる論争や攻撃は決闘に匹敵する」と厳しく非難している [Rush, 1788 : 117]。つまり、人々の間に無用ないさかいを起こす慣習も彼には批判すべきものと映るのであった。

以上のように、社会改革者ラッシュが改良すべきとして挙げたのは、怠惰、浪費、貧困、犯罪といった悪徳や人間の粗暴さを導くような慣習であった。またそれらの悪徳を誘発する場所や機会も批判され、それらを直接的に作り出す飲酒や賭博、口論といった行為も当然批判される。ラッシュは競馬と闘鶏については、娯楽の中で唯一項を設けて批判をしているが、そこでも同様の批判が下記のように繰り返されている。

競馬や闘鶏はモラルにとって好ましくない娯楽であり、もちろん我々の国の自由にとっても好ましくないものである。それらは怠惰や詐欺行為、賭博、俗悪な言葉を生じさせる。そして、ヒューマニティの感情に対する心 (heart) を固くしてしまう [Rush, 1788 : 118]。

またラッシュは日曜日の娯楽についても、「日

曜日に行われる全ての種の娯楽は、怠惰な習慣と快楽への愛をもたらす」[Rush ,1788 : 119]として批判し、それらの娯楽の廃絶に向けた働きかけを牧師達に要請するのである。

4 . 賭博に向けられた批判

ここからは、これまで批判の対象として挙げられたそれぞれの娯楽について、フィラデルフィアで発行された新聞や雑誌の記事から、その批判の中身を具体的に見ていくことにする。

4 1 賭博にとりつかれた人間の不幸

18世紀末フィラデルフィアの言説上で最も批判が浴びせられていた娯楽、それは賭博であった。娯楽規制法でも様々な種類の賭博が挙げられ、ラッシュによっても飲酒とならぶ悪徳として賭博が頻繁に言及されていた。またラッシュが唯一特定の娯楽を挙げて批判した競馬や闘鶏も、人気のある賭博の対象であった。

賭博はそもそも何故批判されたのか。1796年に、新聞に掲載された匿名のエッセイ「賭博について」¹⁰⁾では、賭博の広がりへの危惧が次のように述べられている。

イギリスとフランスの影響を受けて、アメリカでもこの仮想の娯楽 (imaginary pastime) がよく知られるようになってきている。今やこの娯楽は、我が国の人々を身震いさせるほど、憂慮すべき段階にまできている。この町においてもその悪徳は驚くほど広がっている。これは確かな情報であるが、私はこの町で十五ものゲーム・テーブルが夜稼働しているのを知っている [PM, May 14 ,1796]

賭博に用いられるゲーム・テーブルが実際どれくらい稼働していたのかは定かではない。しかし、アメリカの消費文化が成熟してくるこの時期、娯楽に関連する品物も広く出回り、居酒屋の経営者などが多く所有していたとされる (Struna [1991])。フィラデルフィアほどの大

都市であれば尚更であった。

では、賭博の蔓延を憂慮する理由はどこに求められるのであろうか。著者はまず、賭博に没頭する賭博師の様子を次のように描写する。

友人であるその賭博師の目は半分閉じており、病気がちにかすんでいる。彼の青ざめた頬は休息を欲していることを示している。彼のだらしない着衣は、彼の胸騒ぎを示している。彼は勝利がもうすぐだと思い、心は有頂天となっていた。しかしなんとというむごい敗北。空想で描いた城は消え去り、先ほどの憂鬱の二倍のものが彼の精神を包み込む [PM, May 14 ,1796]

ここに描写されているのは、賭博の虜となり、勝利の予感への興奮と敗北の憂鬱を一気に味わった哀れな男性の姿である。この後著者は賭博への執心がもたらす危険性を、より強調するかののように次のように言う。

一度勝ちを味わったものは、まやかしの幻影 (delusive phantom) を追い、それは勝利をすれば終わるのではなく、彼は口に入れるパンを買うため、また体に衣服を着せるのに必要なものが無くなるまで追い続けるのである。ゲーム・テーブルに常に参加していると、正直な行いに対する報酬への喜び、つまり、勤勉の精神が失われる。彼らの嗜好は汚れ、家族にとっての喜びを味合うこともなくなる。そして自然の正しいシステムはゆがみ、必ず精神 (mental) と体の器官には全体的な不調が表れる [PM, May 14 ,1796]

賭博は金銭を浪費させ貧困に陥らせる点でももちろん批判されたが、批判はそれだけに留まらなかった。賭博は労働への意欲や家族への関心を奪い、勤勉の精神も失わせる。そして結果的には、賭博という「仮想」的な「まやかしの幻影」にとりつかれた人間は、精神や体までも蝕

まれていく。著者は賭博がもたらす人間の不幸や悲劇を批判の理由とし、それらを具体的に描写することで賭博の危険性を訴えるのである。

4 2 賭博によって奪われる人間の価値

今見たエッセイとはまた少し異なる観点から賭博への批判を展開しているのが、1791年に雑誌『アメリカン・ミュージアム』¹¹⁾に掲載された「賭博に関する考察」¹²⁾である。冒頭で、「良識のある者 (PRUDENS.)」と自らを名乗る著者は、賭博という悪徳について考えをめぐらすことは有益であると述べ、次のように賭博を批判する。

賭博は節度を持って行なわれることはほとんどないとされている。賭博は情念 (passion) を魅惑し、支配する。アロンの蛇が全ての蛇を飲み込んだように、賭博は全ての情念を飲み込んでいく。賭博師は、愛と友愛の呼び声を無視する。そして愛と友愛への願い、知識や健康、時間、名誉など、人間にとって価値のあるもの全てに対する望みが賭博への愛の犠牲となるのである [AM, January 1791 : 13]

賭博は人間の情念を支配し、人間が価値を置くべき全てのものを飲み込んでいく、そのような恐ろしいものとして描写されている。著者はこの後、賭博とこれらの価値との結びつきを具体的に説明しながら賭博への批判を展開していく。

著者はまず、上の引用に続く部分で、賭博により「人間としての自由」を売り渡し、奉公人にならざるを得なくなったドイツ人の話を引き合いに出す。それに続けて、「継続的な不安と夜更かし」によって賭博は健康を害させるとも述べる。そしてその次に著者が挙げたのが、名誉や信用といった価値であった。著者は、金銭にとりつかれた「賭博師は最低の会計処理者」であり、弁護士や州の評議員、行政官にはなる

べきではないとし、「賭博にとりつかれた者は、おそらく約束を守れず、どんな仕事であれ必要な注意を向けることができない」と言う [AM, January 1791 : 13]

また、人間の名誉に関しては、次のような形でも批判する。

賭博が生じさせるその他の悪い影響は、賭博が最悪の仲間を我々に紹介する点にある。ゲーム・テーブルは墓場と同じく、総ての違いを同じくすると言われている。悪い仲間は我々を不幸にする。彼等は我々の名誉を傷つけ、もし我々が気をつけなければ、我々はすぐに悪人となってしまう [AM, January 1791 : 14]

娯楽の階級分化が起こるまで、賭博を伴う娯楽は貧困者から王まで、階級を超えて楽しめるものであった。特に闘鶏や競馬はイギリスのジェントルマンが熱狂的に支持し、彼らは自身がその娯楽を楽しむとともに、それらの娯楽を主催することで自分達の威厳を示し、庶民に対するパターン的な関係性を保持していた (マーカムソン [1993 : 147 156]) (松井 [2000 : 62 72, 182 184])。しかしここでは、階級を超えた娯楽の共有は、「悪い仲間」との接触をもたらし、名誉を傷つけるものとして危険視されている。そしてこの引用文の「我々」と「彼等」が誰であるかを考えればわかるように、人間にとって価値あるものを奪う賭博の危険性を回避し、「悪い仲間」つまり貧困者や労働者と厳然と区別されなければならないとされているのは、中上流階級の人々であった。

しかし、賭博は彼らからこれらの価値を奪うだけではなく、次のような悪影響ももたらすと

言う。

一つ、この賭博という主題についてどの著者によっても指摘されていないと思われる賭博の非常に悪い影響がある。それは、賭博が心

を固くする (harden the heart) 傾向があるということである [AM, January 1791 : 13]

著者は賭博の危険性について、「賭博が心を固くする」と言う。そしてこの意味を説明するにあたり、下記のように述べる。

私はかつて、ひどい賭博師が次のように言っているのを聞いたことがある。(彼は賭博で儲けた利益で主に生活していた)「友達に対するばかげた哀れみ (foolish pity) が、手にするはずだった多くの利益を私に我慢させた。そこで私は今後、誰のことも気にかけないと決心したのだ。」我々は常に心を柔らかく (tender) 保ち、他人の苦悩に敏感でなければならないという義務を負っている。それは確認するまでのないことである。(中略) 感じる心は、多くの点で神のご加護と考えることができる。その心は、徳への強い志向を含んでいる。なぜなら、もし我々が他人の悲劇に何かを感じれば、我々はその悲劇を進んで起こそうなどとはしないであろうから。けれども本当に愚かな悲劇に対して身を守り、我々の感受性 (sensibility) を常に理性にしたがわせておけるかどうかは、我々の肩にかかっているのである [AM, January 1791 : 13]

ここで言われている心とは、他人の苦悩や悲劇を感じる心であり、感受性とも言い換えられるものであった。その心は、他人に悲劇をもたらさないために常に柔らかくなければならず、著者に言わせれば、他人の財産を奪い、平然と相手を苦悩と悲劇に陥れる賭博師はすでに心が固くなった人間であった。人間を悲劇に対して無関心に鈍感にさせ、神のご加護に背かせる、そういった観点からも賭博は批判されたのである。

著者は最後に、賭博がもたらすもう一つの悲劇を次のように付け加える。

またゲーム・テーブルは友人同士の間でさえ、とても危険な口論を生み出す傾向が大いにある。上品なサークルであれば、勝ち負けの際には平静な態度が見られるであろうと予想されるであろう。しかし、どんな地位の賭博師達でも、言い争いや決闘は見受けられる。つまり、賭博は世界を悲劇に満ちさせる。それは高貴な生活の人々であれば決闘だけでなく、自殺も、そしてそれほどでもない生活の人であれば強盗が、しばしばこの致命的な情念の結末なのである [AM, January 1791 : 14]

賭博による興奮状態により引き起こされる友人同士の口論や決闘、そして敗北の失望による自殺、これらも賭博がもたらす悲劇であった。筆者はこれらの悲劇を被らないためにも、また他人に被らせないためにも、賭博から手を引くことを訴えるのである。

ここまで見てきたように、賭博が批判された理由は単に金銭的浪費や貧困といったものだけではなかった。勤勉の精神や家族への関心、知識と健康、自由や名誉、他人の悲劇に対する感受性など、人間が価値を置くべきものを奪い去り、人々を悲劇に導く危険なもの、それが賭博であった。それは裏を返せば、賭博が奪うとされたものこそ、これ以後社会において重んじられていく価値に他ならなかった。アメリカにおいて、健全な家庭生活、いわゆる「近代家族」を一つのシンボルとした「ミドリリング・クラス」が登場するのは、19世紀初頭のことである (Ryan [1981])¹³⁾。この新しい階級意識の登場を目前に控えたこの時期、賭博は悪徳や「悪い仲間」である下層階級と結び付けられ、人々には賭博という娯楽への批判を通じて新たな価値が提示されつつあったのである。

5. 残虐な娯楽に向けられた批判

娯楽への批判の中でも賭博と並び頻繁に登場していたのが、口論や決闘、そして動物同士を

闘わせるアニマル・スポーツといった種の娯楽であった。ここからはこれらブラッド・スポーツと呼ばれた娯楽への批判と、そこで用いられたレトリックに着目し、その特徴を分析してみたい。

5 1 決闘の残虐性を嫌悪する眼差し

決闘とはいわゆる喧嘩であったが、素人同士の喧嘩が発展したものと、賭けを伴う見せ物としての決闘があった。後者のタイプの決闘はグローブの着用や反則技の制定によりルールが厳格化され、19世紀後半にはボクシングやレスリングとして競技スポーツ化されていく。しかしそれ以前においては、「ブラッド・スポーツ」として、文字通り流血の事態になるまで殴り合いや取っ組み合いが行われ、娯楽規制法でも見たように、武器が持ち出され、敗者が死に至ることも珍しくなかった。むしろ、血なまぐささと相手の攻撃に堪え忍ぶ人間の姿こそが、この種の娯楽の魅力であった（松井 [2000 : 130 180]）。

決闘がこの時期のフィラデルフィアでどの程度行われていたのかを正確に把握することは難しい。しかし、法的な規制の対象となっている点を考えると、一定程度行われていた娯楽であったと推測できる。また娯楽規制法の中で、違反者に最も厳しい処罰が定められていたのが決闘であった。では、決闘を批判する言説とはいかなるものであったのか。以下ではこの点を見ていくことにする。

決闘への批判を論じた言説としてここで取り上げるのは、1787年に『アメリカン・ミュージアム』に掲載された「ガウジングについて」¹⁴⁾という短い記事である。エッセイの冒頭、匿名の著者は、「古代にまで遡ってみても、理性を持った人間同士で行われる決闘の形態で、最近アメリカに流入してきたあの慣習ほど、いまいまして、地獄のような慣習を見つけることはできない」[AM, May 1787 : 395]とまずは述べる。そして次のように、その決闘の様子を描写

する。

最近、私の一人の友人は、ボクシングをしている二人の男性の間で繰り広げられる恐ろしい光景を目にした。その二人はそれまで、お互いに不正無く尊厳を守り、プロートニアン・ルール¹⁵⁾に従うと約束していた。二人のうち一人はまじめにその約束を守り、彼の敵を投げては、彼が立ち上がってくるのを待ち、闘いを再開していた。そして彼は相手にもそのような行為を期待した。しかし、これから述べる光景を思い出すのもなんと忌々しいことであろうか。彼がその寛大な対戦相手に初めて一撃を加えた時のことである。そのモンスターは自分の大きな体でそのかわいそうな相手に飛びかかり、そうするやいなや彼は指を相手の両目に入れ、それらを掴みだし、地面に投げつけ、そしてその残虐な行為に喜びながら彼を置き去りにしたのである。周知のように、殺人より恐ろしいこのような行為を説明するような人間の法則など存在しないのである [AM, May 1787 : 395]

このエッセイのタイトルになっている「ガウジング (gouging)」とは、決闘で用いられた相手の両目をえぐる行為であった。著者は友人が目にしたとされる決闘の様子を、その情景が今にも浮かんでくるほど生々しく描写し、その残虐性を訴える。

この描写がどれほど正確であるかはここでは重要ではない。重要なのは、残虐性や暴力性を目にすることが楽しみとされてきた決闘という娯楽が、その楽しみの要素であった残虐性を理由に批判され、しかもその残虐性を敢えて強調するかのよう描写がなされているという点にある。そこにはそれまでの決闘の観衆のように、残虐性を楽しみとする人々ではなく、残虐性を嫌悪する人々が想定され、このエッセイは紛れもなく後者の読者に向けて論じられている。

著者は最後にこの決闘に敗北した男性の哀れな姿を次のように描写する。

そのかわいそうで哀れな被害者は、日々の労働によって愛する妻や六人のかわいい子ども達を支えていたのだが、今や寄る辺のない無力な男性である。そしてそのかわいそうな目の見えない親は、痛ましい感情を呼び起こす対象となってしまったのである [AM, May 1787 : 395]

決闘の残虐性に加えて、決闘がもたらす悲劇も読者に訴えかけた後、ガウジングを規制する法律の必要性を唱え、著者は論を閉じるのである。

5 2 動物に対する残虐性により破壊される感受性

人間同士の決闘の他、動物同士を戦わせる闘鶏や牛いじめなどのアニマル・スポーツも、その暴力性や残虐性、動物愛護の観点から、この時期少しずつ批判され始めていた。イギリスでは18世紀後半より批判が本格化し、19世紀になると動物愛護団体により、アニマル・スポーツの禁止や動物実験の廃止などを定めた法律が提出されていく。アメリカでもイギリスに続く形で19世紀初頭からアニマル・スポーツ批判は展開され、人間と動物の類縁性を唱えたダーウィンの進化論が両国で広まり始めると、その勢いは益々増していった(ターナー [1994])。

18世紀末アメリカにおいて、アニマル・スポーツはまだ本格的な批判の対象とはなっていない。しかし、先に引用したラッシュは、いくつかの論説の中で、動物を用いた娯楽や動物への残虐性について言及している。その中でも「物理的(身体的)原因がモラル・ファカルティに与える影響についての考察」(1786)(以下「影響についての考察」)¹⁶⁾と題する論説の中で、彼は食事や飲み物、睡眠など、人間のモラルに影響を与えるいくつかの物理的要因を論じ、そ

の一つとして動物への残虐な行為について論じている。

彼は動物への残虐な行為と人間のモラルとの結びつきを次のように述べる。

動物に対する残虐性は(Cruelty to brute animals)モラルの感受性(moral sensibility)を破壊してしまうもう一つ的手段である。(略)ホガースは彼の天才的な絵画¹⁷⁾の中で、若い頃の動物に対する残虐性と、成人してからへの殺人との関係性を指摘している。(略)私はモラルと動物に対するヒューマニティとの関係性が真実であるということに非常に満足している [Rush, 1786 : 120]

引用の最初で述べられる「動物に対する残虐性は、モラルの感受性を破壊してしまう」とはどういうことなのか。この意味を理解するためには彼が用いるモラルの意味を正しく理解しなければならない。精神科医であるラッシュが用いるモラル、正確にはモラル・ファカルティとは、実は単なる道徳や風紀といった意味ではなく、神が人間に埋め込んだ、善性や美德をつかさどる一つの機能であった¹⁸⁾。彼は、「感受性は、モラル・ファカルティまでの通り道であり、それ故に、感受性を減じさせるようなものは全てモラルも傷つける」[Rush, 1786 : 120]とも述べるが、外部の刺激を受け取る感受性もまた一つの機能のようなものであった。つまり、動物への残虐な行為という物理的要因もしくは刺激は、モラル・ファカルティやそれを働かせるために必要な感受性を文字通り「破壊」する危険な行為であり、そのためにラッシュはそれらの行為を批判するのである。

動物への残虐な行為が人間の精神の機能に悪影響を及ぼすといった表現は、先に見た「モラルに関する演説」の中でも実は見られていた。彼は競馬や闘鶏について次のような批判をしていた。

競馬や闘鶏はモラルにとって好ましくない娯楽であり、もちろん我々の国の自由にとっても好ましくないものである。それらは怠惰や詐欺行為、賭博、俗悪な言葉を生じさせる。そして、ヒューマニティを感じる心を固くしてしまう (harden the heart against the feeling of humanity) [Rush, 1788 : 118]

注目すべきは最後の部分である。ここでラッシュは、ヒューマニティを感じる心、すなわち感受性を鈍らせると競馬や闘鶏を批判していた。また子どもの娯楽について論じた「学校でふさわしい娯楽と罰についての考察」においても、ラッシュは「狩猟は、動物に不必要な痛みと死をもたらすことによって心を固くする」 [Rush, 1796 : 60] と、同様の表現を用いて狩猟を批判している。動物に痛みや死をもたらすような残虐性と暴力性を伴う娯楽は、ラッシュの医学的人間観からすれば、人間の重要な機能を破壊する行為として見なされるのである¹⁹⁾。

しかし、必ずしもラッシュのように医学的人間観を有していない著者においても、「心を固くする」や「心を柔らかく」といった表現、「感受性」といったキー・ワードは娯楽批判の中に登場する。先に見た賭博批判においても、他人の悲劇に対する感受性を語る際、「心を固くする」という表現が用いられ、心や精神への悪影響が娯楽批判の一つの根拠とされていた。また、娯楽によってもたらされる人間の悲劇や、決闘や動物を用いた娯楽の残虐性を強調することで読み手の感受性を刺激し、残虐性や悲劇を嫌悪させるように導くレトリックが度々用いられていたのは、見てきた通りである。人間の感受性への注目、これもこの時期の娯楽批判の一つの特徴であった。

最後に感受性に関してもう一つ付け加えておけば、ラッシュは「影響についての考察」の中で、感受性を活性化させる物理的要因を最後に挙げているが、そこで次のように言う。

モラルを促進するための機械的方法として、最後に私は、貧困や病気による苦境の場面に親しんでおくことで、感受性を活性化させておくという方法を述べておく。人間の胸中に同情心が呼び起こされる時、そこには必ず様々な美德も伴ってくる。それゆえに、英知ある人は次のように的確に言うであろう。「顔に表れる悲しみの表情によって心はより良くなるのである」 [Rush, 1786 : 120]

このようにラッシュは感受性を活性化させるために、貧困者や病人の苦悩に頻繁に接し、人間の中にある同情心を呼び起こすことを勧めている。ここでラッシュが何を具体的に述べようとしているのかを明確に言うことはできない。しかし、貧困者向けの無料診断所や奴隷解放運動、刑務所改革などに携わるラッシュが、苦悩する人々を救済する慈善活動や社会改革への参加という新しい余暇を人々にここで勧めていると解釈したとしても、大きく間違いではないであろう。社会改革を支えていくような他人や動物に対する感受性、これも娯楽批判を通じて人々に提示された一つの価値なのであった。

おわりに

本稿は、18世紀末フィラデルフィアの娯楽批判の特徴を、社会改革者の論説や、新聞、雑誌に掲載された娯楽批判のエッセイから明らかにしてきた。アメリカの社会改革初期にあたるこの時期の娯楽批判では、娯楽につきものとされてきた飲酒や賭博、暴力といった要素は徹底的に批判され、怠惰や浪費、貧困、犯罪から人々を引き離すことが目指されていた。その際に強調されたのは、娯楽とそれらの悪徳との結びつきもさることながら、それらの娯楽や慣習が人間にもたらす不幸や悲劇であり、また娯楽が人間の心や精神にもたらす悪影響であった。それらの批判は、ラッシュのように意識的であれ、無意識であれ、「心」や「精神」、「感受性」といったキー・ワードと医学的レトリックが用い

られることにより、当時のアメリカで最も科学的、医学的理論が発達していたとされるフィラデルフィアにおいてはおそらく否応なく説得力を持ち得るものであった。

またこの時期の娯楽批判は、単に古い娯楽を批判し、人々を悪徳から引き離すというだけではなく、新たな価値を創出、提示する場ともなっていた。健全な家庭生活や勤勉の精神、名誉、時間、健康、他者や動物の悲劇や痛みへの感受性といった人間の価値を奪い去る危険なものとして娯楽は描写されるが、そのことが逆に、それらに新たな価値を付与していった。それはつまり、それらの価値を体現し、貧困者や労働者と区別されるべき階級、「ミドリング・クラス」の登場に、娯楽批判の言説が一つの場を提供していたとも言える。18世紀末フィラデルフィアの娯楽批判とは、19世紀の本格的な社会改革を支えていく「ミドリング・クラス」の価値観が少しずつ創出され、人々に提示される、そういった言説空間でもあったのである。

注

- 1) An act for the suppression of vice and immorality, 1779 (9 St.L.333, Ch.833)
- 2) An act for the prevention of vice and immorality and unlawful gaming and to restrain disorderly sports and dissipation, 1786 (12 St.L.313, Ch.1248)
- 3) An act for the prevention of vice and immorality and of unlawful gaming and to restrain disorderly sports and dissipation, 1794 (15 St.L.110, Ch.1758)
- 4) 上記1794年法からの引用は [] 内に Section 番号を記載する。
- 5) シャッフル・ボードは、シャヴェルボードとも言われる「特別の卓の上で行う、金属のおもりを突く玉突きに似た屋内遊技」(マーカムソン [1993: 78])。
- 6) ラッシュの精神医学的人間観については(高野 [2001])に詳しい。また、彼の社会改革を支える人間観については(乙須 [2004])(乙須 [2006])も参照されたい。
- 7) Benjamin Rush, “Thoughts upon the amusements and punishments which are proper for schools” (1796)
本稿で用いるラッシュの史料は特に説明がない限り、ラッシュの著作集として発刊された *Essays, Literary, Moral and Philosophical* (Philadelphia, 1798) に所収されているものを利用する。[] 内には発表年と引用ページ数を記載する。
- 8) Benjamin Rush, “An address to the ministers of the gospel of every denomination in the United States, upon subjects interesting to morals” (1788)
- 9) Benjamin Rush, “An enquiry into the effect of spirituous liquors upon the human body, and their influence upon the happiness of society” (1784)
- 10) “On gaming” *Philadelphia Minerva*, May 14, 1796
以後 *Philadelphia Minerva* は本文中 PM と略記し、本紙からの引用は [] 内に掲載年月日を記載する。
- 11) *The American Museum, or Repository of Ancient and Modern Fugitive Pieces, &c. Prose and Poetical*
以後本文中 AM と略記し、本誌からの引用は [] 内に掲載年月とページ数を記載する。
- 12) “Observations upon gaming” *American Museum*, January 1791
- 13) 家庭生活と娯楽の関係性について、例えばラッシュは、「モラルに関する演説」の中で、「クラブは男性を怠惰にし、浪費させ、借金を作らせる」と述べた後、「社会が無害に、そして改善されるのは、唯一、私的な家族の中においてである」と述べる [Rush, 1788: 118]。つまり、悪徳と結びつく男性同士の会合や娯楽は、無害な家庭生活と対比されるのである。
- 14) “On the practice of gouging” *American Museum*, May 1789
- 15) 1743年に拳闘家ジャック・ブロートンが成文化した七カ条からなるルールで、ダウンした者への加撃などが禁止されている(松井 [2000: 138-139])。
- 16) Benjamin Rush, “An enquiry into the influence of physical causes upon the moral faculty” (1786) *American Museum*, February 1789
ここでは、*American Museum* に再掲されたものを利用し、[] 内には雑誌のページ数を記載する。
- 17) イギリスの風刺画家ウィリアム・ホガース (Hogarth, William) が描いた四枚の絵からなる「残酷の四段階」(1750-1751)。少年トムが動物虐待に興じる第一段階から始まり、第四段階では死刑囚となったトムの公開解剖の様子が描かれる。彼はこの他にも「闘鶏場」(1759)など、アニマル・スポーツへの批判を風刺画として残している(森 [1981])。
- 18) ラッシュが用いる「モラル」については(乙須 [2004])も参照されたい。

19) ラッシュは公開刑や子どもへの体罰を批判する際にも、暴力性や残酷性を伴う外部刺激がモラル・ファカルティや感受性、共感性 (sympathy) の機能に与える悪影響について同様な形で論じている (乙須 [2006]).

引用・参考文献

- Boylan, Anne M. (1988) *Sunday School: the Formation of an American Institution, 1790-1880*, Yale University Press.
- Glenn, Myra C. (1984) *Campaigns against Corporal Punishment: Prisoners, Sailors, Women and Children in Antebellum America*, State University of New York Press.
- Haviland, Margaret M. (1992) "In the World, but not of the World: the Humanitarian Activities of Philadelphia Quakers, 1790-1820", Ph.D. diss. University of Pennsylvania.
- Jable, Thomas J. (1978) "Aspects of Moral Reform in Early Nineteenth-Century Pennsylvania", *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 102 (3), pp.344-363.
- Martin, Scott C. (1995) *Killing Time: Leisure and Culture in Southwestern Pennsylvania, 1800-1850*, University of Pittsburgh Press.
- Nash, Gary B. (1976) "Poverty and Poor Relief in Pre-Revolutionary Philadelphia", *The William and Mary Quarterly* 33 (1), pp.3-30.
- Rothman, David J. (1990) *The Discovery of the Asylum: Social Order and Disorder in the New Republic* (2nd ed., revised), Aldine de Gruyter.
- Ryan, Mary R. (1981) *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865*, Cambridge University Press.
- Struna, Nancy L. (1991) "Gender and Sporting Practice in Early America, 1750-1810", *Journal of Sport History* 18 (1), pp.10-30.
- ヴェーバー, マックス (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.
- ターナー, ジェイムズ (1994) 『動物への配慮 - ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性 - 』法政大学出版局.
- マーカムソン, ロバート W. (1993) 『英国社会の民衆娯楽』平凡社.
- 乙須翼 (2004) 「『モラル』による多様性の統合 - 革命期ペンシルヴェニアにおける人間像の変容と B・ラッシュ - 」『多文化国家米国における学校の公共性議論に関する史的研究』(科研報告書: 研究代表者大桃敏行), 1 22頁.
- 乙須翼 (2006) 「18世紀後半ペンシルヴェニアの施設化改革と家族 - B・ラッシュの規律論における理想的親像に着目して - 」『西洋史学論集』44号, 37 52頁.
- 高野泰 (2001) 「ベンジャミン・ラッシュと精神医学の誕生」『東京成徳大学研究紀要』8号, 63 80頁.
- 高野泰 (2007) 「建国期アメリカにおける共和主義文化の創造 - ベンジャミン・ラッシュの temperance にみる - 」『史境』55号, 64 88頁.
- 松井良明 (2000) 『近代スポーツの誕生』講談社.
- 村田邦子 (1993) 『アメリカ教育理念の形成 - 植民期ペンシルヴェニア・クエーカー研究 - 』亜紀書房.
- 森洋子 (1981) 『ホガースの銅版画』岩崎美術社.